（別紙２）

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　　坂　野　正　則

坂野正則氏の論文「17 世紀フランスにおける篤信家とパリ外国宣教会の成立」は、イエズス会などの修道会と並んで、カトリック海外宣教に重要な役割を演じたパリ外国宣教会の成立過程を、カトリック宗教改革期における「篤信家」(dévots)の信徒運動に関連づけながら、幅広い政治的・経済的・社会的・宗教的文脈のなかで解明した労作である。

本論文は二部構成をとり、まず第一部ではパリ外国宣教会成立の前史を論じる。はじめに王国政府によるヌヴェル・フランス（カナダ）植民地建設が、「百人会社」に参加した篤信家たちの宣教事業と密接に関連して推進されたこと、つぎにこの宣教事業が、大西洋沿岸の港湾都市ラ・ロシェルを前線拠点として、民間事業との協力関係のもとに推進されたことを明らかにし、最後に篤信家の主要組織であるパリ聖体会・貴顕信心会・良友会の結社形態と信仰実践と社会活動とを分析して、それらがいかにしてパリ外国宣教会の成立を準備したかを論じる。第二部ではパリ外国宣教会の成立初期、すなわち 1660 年代初頭から 17 世紀末までの歴史を論じる。まず四名のフランス人使徒座代理区長が任命されたのち、創立されたパリ外国宣教会とローマ布教聖省とのあいだを媒介した亡命スコットランド人聖職者ウィリアム・レズリの役割を分析して宣教組織の国際的性格を解明し、つぎにその宣教理念と教会裁治権、またパリ本部神学校による宣教師養成の特徴を論述したのち、最後にフランス東インド会社との協力のもとに推進されたアジア宣教の実践を、篤信家人脈の持続性の視点から考察して、活動の広汎な社会的基盤を再構成している。

本論文は、パリ外国宣教会の基本文書に加えて聖職者・宣教師らの書簡など未刊行史料を豊富に利用し、旧来の制度的アプローチを超える社会史・人物誌の方法を導入することにより、宣教活動を支える国内的･国際的ネットワークを解明した点に大きな功績がある。それはフランス本国における研究も含め、この分野の歴史研究を進展させる重要な貢献であると評価できる。たしかに論文として不充分・不完全な点はあり、なお改善の余地が残されている。序論は議論を整理しきれていない印象をあたえ、本論では叙述が細部に没入しがちであり、また史料の冗長な引用が多い。日本語の文章表現にも、不適切な用語法や理解困難な表現が散見される。そして内容的にも、史料にあらわれる宗教者の言説に対して、批判的距離が不足しているという指摘もなされた。

それにもかかわらず、本論文はいわゆる「植民地化の尖兵」としての宣教師という視点を超えて、宗教者すなわち当事者の視点からパリ外国宣教会を考察し、それを準備した精神的・社会的「土壌」である篤信家の存在に着目した点で独創的な研究であり、その学問的貢献の重要性は疑う余地がないと考えられる。

以上の理由から、本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると判定する。